

ワークショップ1

教・職・学で考える大学の学び

報告者

- 竹中 喜一 氏 近畿大学 IR・教育支援センター 准教授
- 石井 和也 氏 宇都宮大学 大学教育推進機構 基盤教育センター 准教授
- 岸岡 奈津子 氏 立命館大学 学生部 Student Success Program(SSP)
学生支援コーディネーター
- 肥田 奈緒子 氏 成城大学 教育イノベーションセンター 主任

コーディネーター

- 多田 泰紘 氏 京都橘大学 経営学部 専任講師
- 根岸 千悠 氏 京都外国語大学 共通教育機構 講師

〈ワークショップ 1〉

教・職・学で考える大学の学び

コーディネーター

京都橘大学 経営学部 専任講師 多田 泰紘
京都外国語大学 共通教育機構 講師 根岸 千悠

○本ワークショップのねらい

FD や SD についての研修やそれに基づく授業、業務の改善が各大学で行われている。多くの教職員が学内外の研修に参加し自大学での授業・業務の改善を目指している。しかしながら、これらの取り組みがどれほど学生の活動に効果を与え、彼・彼女らの大学での学びを促進しているのだろうか。

そこで、本ワークショップでは教職員による授業・業務改善や学生支援といった取り組みについて、学生の学びという視点で見つめ直し、その効果と課題について教職員に学生を加えて議論した。

○報告の概要

本ワークショップは前半の事例紹介と後半のグループワークの二部制とした。前半の事例紹介では、規模や立地が異なる4つの大学に所属する2名の教員と2名の職員、3名の学生から、各大学でのFD・SDの取り組みや、教学マネジメント、IR、学生支援について情報提供を行った。

はじめに、近畿大学で学内のFD・SDをコーディネートされており、学外での研修も多数企画・運営されている竹中喜一氏より「FD・SDの動向と実際：よりよい学生の学びにつなげるために」というタイトルでご講演いただいた。特に、学生が参画するFD・SDについて、その効果や気を付けるべき点に着目して、複数大学の事例を紹介いただいた。

続いて、宇都宮大学で教学マネジメントや学修支援に携わっておられる石井和也氏より「ピアサポート組織を立ち上げるために教職員は役に立つのか：宇大ラーニングサポーターを事例として学生とともに考える」というタイトルでご発表いただいた。学修支援はFD・SDと学生の学びをつなぐひとつの具体例であるが、石井氏は学生が主となって学修支援を提供する宇大ラーニングサポーター制度の創設と運営・改善に取り組まれている。今回のご講演では同大学の宇大ラーニングサポーターの活動や教職員がどのように伴走するかについてご報告いただいた。また、実際に宇大ラーニングサポーターとして活動している2名の学生が登壇し、学生の立場で考えることや思い、活動から得た学びが語られた。

また、立命館大学でStudent Success Program (SSP) をコーディネートされている岸岡奈津子氏から、本プログラムが目指す、学生生活への適応と展開、将来を見据えた自己理解の深化を促す取り組みについてご講演いただいた。特に、学生の多様な側面と抱えている課題をサポートする部署連携について事例が紹介された。

最後に、成城大学で教育改革やFD・SD活動支援に携わっておられる肥田奈緒子氏にご登壇いただいた。本講演では、教員の授業実践上の工夫や優れた取り組みを「見える化」した「授業カタログ」や、教育の質向上につなげる「ベストティーチャー表彰制度」等についてご講演いただいた。特に、学生が学生の学びをサポートするピアサポートの事例紹介は有意義であった。また、実際に成城大学ピアサポーターとして活動する学生が登壇し、「授業カタログ」の取材や学長懇談会といった、学生が教職員のFD・SDを促進する取り組み事例について共有された。

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

4名の教職員と3名の学生による事例報告をもとにグループワークを行った。具体的には参加者を6つのグループに分け、教職員は各大学の取り組みで印象に残ったことや自大学に取り入れたいこと、自大学に取り入れるにあたっての課題や悩みなどを、学生は自分たちの学びにおいて、どのようなニーズがあるか、また、自分たちが関われることについて、情報共有と意見交換を行った。すべてのグループに教員、職員、学生を1名以上配置し、議論の促進を図ったこともあり、どのグループも活発な議論が展開された。グループワーク後の全体共有では、3つのグループから各グループの議論について共有がされた。

最後の質疑応答では、登壇者から率直かつ建設的な質問が寄せられた。例えば、学習支援における部署間連携について、具体的な方法や気を付けておくべき点に関して質問が出るなど、参加者が自大学での

FD・SDを学生の学びにつなげようとする積極的な姿勢が見られた。本ワークショップは、教職員の取り組みを学生の学びにつなげる非常に有意義な機会となった。

スライド1

FD・SDの動向と実際 —よりよい学生の学びにつなげるために—

近畿大学 IR・教育支援センター
竹中 喜一
yoshikazu.takenaka@kindai.ac.jp

スライド2

講師紹介

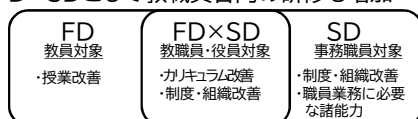
- 石川県金沢市出身
- 教育工学（人はどうやったらよく学べるか）が専門。博士（人間科学）
- 民間企業（4年）、関西大学職員（10年）、愛媛大学教員（5年）を経て現職
- TA・SA・IA制度設計と運用、授業支援、ライティング支援、教職員の能力開発、カリキュラム開発支援、教学IRなどを担当
- 著書に『シリーズ大学の質保証2 学習成果の評価』（編著）、『大学SD講座4 大学職員の能力開発』（共編著）、『大学の学習支援 Q&A』『大学FD入門』（分担執筆）など



スライド3

FD・SDの概要

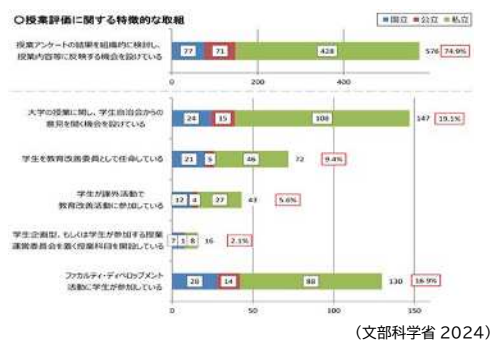
- FDはFaculty Development
- SDはStaff Development
- 大学設置基準で義務化(大学院、短期大学も)
- FD×SDとして教職員共同の研修も増加



- FD、SDとも内容は各大学等に委ねる
- 講演会、シンポジウム形式が最も多い(FD)
(文部科学省 2024) ³

スライド4

FDでの学生参画



スライド5

新任教員研修での学生登壇

- プログラム「近大生を知る」に学生が登壇
 - ・「学修サポートデスク」の説明
 - ・近大生の様子の語り
 - ・新任教員からの質疑応答

5

スライド6

学生モニター会議

- 手順
 - ①各学科/コース/専攻から数名ずつの学生モニターを招集
 - ②半期/1年/在学期間を振り返っての意見を指定用紙に記述
 - ③記述内容について同じカリキュラムの学生同士で議論し、適宜追記した後に提出
 - ④記述内容を取りまとめ、コンサルタント教員が学部代表教員にフィードバック
- 指定用紙の項目例
 - ・「あなたの学習につながった科目とその理由」
 - ・「カリキュラムや授業で改善してほしいものとその理由」
 - ・「学びを深めるために自分で工夫した点」
 - ・「施設等についての要望」

6

スライド7

収集した意見の例

- (インターンシップ)の行き先を自分たちで決めたかった
 - 質的データの収集と分析…についての授業が少なかった
 - (ある特定の)〇〇の授業について内容が難しい
 - 理系の授業がもう少し欲しい
- 開講年次や担当者の変更、新規科目開講、フィールドワークの改善などに活用

(仲道・片岡 2020)

7

スライド8

三者協働型によるFD/SD研修

- 教職員と学生が受講者となる研修プログラム
 - ・テーマは教育・学習支援、大学広報など
 - ・2017年、SD義務化を契機に教職協働で開発
 - ・大学教育に関心を持つ学生、学内教員、1年目職員などが受講
 - ・職員は研修運営だけでなく、講師も一部担当

開催日	内容(2022年度)
10/24	本学の学生調査結果から関大・関大生の未来を考える
11/ 7	大学教育の質ってどうやって保証されるの？
11/21	対面と遠隔を併用した授業実践報告
12/ 5	インストラクショナルデザインを活かした授業実践
12/19	グループワーク
1/16	各グループによる発表(学内公開)

(関西大学教育開発支援センター 2023) 8

スライド9

三者協働型によるFD/SD研修の成果

- 視野の広がり
 - ・自分の部署からの目線だけでなく、全学的な目線から業務を見る心がけが持てるようになった(職員)
 - ・物事の見方が変わり、さらに視野を広げることができました。1つの課題にも、多くの意見があることを知ることができました(学生)
- 業務(学業)の行動変容
 - ・学生と同じテーマで話すことができ、こういう場を自分の部署でも(業務でも)積極的に作ろうと思いました(職員)
 - ・相手の立場を考えながら、意見を伝えることができるようになったと思います。みなさんと立場が違う中で、どのような考えが求められているのかを考えることが多かったです(学生)
 - ・同じような情報を与えられても、その文脈が厳密に示されていないと、さまざまな理解が生じることも、いろいろなワークショップでこれまで体験してきたことですが、改めて自分の授業や仕事に引きつけて考えてみたいと思います(教員)

(竹中 2018) 9

スライド10

学生参画によるFD・SDのポイント

- そもそもFD・SDとは
 - ・知識、技能、態度習得の場
 - ・学内関係者間の対話の場
 - ・新たなアイデアや考えの創造の場(知の創造)
- 学生参画によるメリット
 - ・上記の場が活性化(特に2つ目と3つ目)
- 学生参画の注意点
 - ・「学生にとって何がメリットか？」に答えられる
 - ・参画を求める学生の募集方法、選定方法を考える
 - ・活動主義に陥らない
 - ・継続性と発展性を考える
 - 企画の具体化、施設・設備の改善、など

10

スライド11

参考文献

- 関西大学教育開発支援センター(2023)「2022年度三者協働(学生・教員・職員)によるFD/SD 研修プログラムの最終報告会記録」『関西大学高等教育研究』第14号、pp.111-123
- 竹中喜一(2018)「大学職員の能力育成に関する研究—学習共同体の機能に着目して—」大阪大学大学院人間科学研究科博士論文
- 仲道雅輝・片岡由香(2020)「授業コンサルティングの手法を用いたカリキュラムコンサルティングの試み—社会共創学部環境デザイン学科の取り組み事例—」『IR News』第7号、p.5
- 文部科学省(2024)「令和4年度の大学における教育内容等の改革状況について」

11

スライド1

2025年3月1日(土) 能谷大学 深草キャンパス
2024年度 第30回 FD・SDフォーラム



ピアサポート組織を立ち上げるために教職員は役に立つのか
—宇大ラーニングサポーターを事例として学生とともに考える—

宇都宮大学
大学教育推進機構
ラーニングサポートオフィス長
基盤教育センター副センター長
教学マネジメント企画室副室長
石井 和也 ishii@a.utsunomiya-u.ac.jp

石井の経歴:
◆東京一宮都 (約15年) →宇都宮 (約7年)
◆社会学
◆昔の地図・路線図、大正・昭和初期の『鉄道旅行案内』
◆組織運営のためになんでもやる人 (でした)

スライド2

もくじ

- 1.宇大ラーニングサポーター (宇サポ) の概要
- 2.宇サポ創設の経緯
- 3.【参考】宇サポはなぜ熱心に活動するのか
- 4.【参考】学生参画の一環としての宇サポ
- 5.文献

スライド3

宇都宮大学の紹介

学士課程学生数(2024年度)

データサイエンス経営学部	59名
地域デザイン科学部	616名
国際学部	465名
共同教育学部	717名
工学部	1,429名
農学部	875名
合計	4,161名

※大学院生は1,004名

地域で学ぶ、地域と学ぶ



スライド4

宇大ラーニングサポーターの概要

組織の概要と目標 (2025年2月現在)

大学院生	3名
4年次生	1名
3年次生	9名
2年次生	4名
1年次生	5名
合計	22名

宇大ラーニングサポーターの主な活動内容

定期的な相談窓口 (毎週火曜日18~21時)	学修に関するイベントの実施	基盤教育科目の授業サポート
---------------------------	---------------	---------------

宇大ラーニングサポーターの目的

すべての宇大生が宇都宮大学という場を最大限に活かし、主体的かつ自律的に学びきって卒業できるよう、学生の立場から同じ目線でサポートを行う。

宇大ラーニングサポーター (サポーター全員で対応)

定期的な相談窓口 (サポーター全員で対応)

アカデミックサポート

定期的な相談窓口のサービスとして、大学授業・学習方法をサポート。

スライド5

宇大ラーニングサポーターの概要

活動内容

- ① 授業外での学修サポート
- ② 学生生活面の相談対応
- ③ レポートの書き方や、人文・社会・自然科学系の基礎的学修のサポート (大学院生、学部4年生のみ)
- ④ 宇大生の学修に役立つイベントの企画・実施
- ⑤ 基盤教育科目での授業サポート
- ⑥ リベラルアーツ科目「異文化理解の世界B (ピアサポート入門)」
「異文化理解の世界C (ピアサポート実践)」への参加
- ⑦ ラーニング・ commonsの環境整備と夜間の管理
- ⑧ 毎週火曜日18:00-21:00に実施の定例ミーティングへの出席 (必須)

スライド6

宇大ラーニングサポーターたち

宇都宮大学広報誌
UUnow第58号



公式ウェブサイト



スライド13

13

基礎教養科目の詳細

授業の内容・到達目標・進め方
1年次の時点での宇大スタンダードの獲得状況を把握する

授業の内容
人文科学/社会科学/自然科学における重要な概念や考え方に触れることで、基本となる知識の修得と、自ら問いを立て、それに対する答えを見出そうとする姿勢の確立を目指す。

到達目標
人文科学/社会科学/自然科学の基本的な知識を身につけ、その過程において宇大スタンダードに明記されている汎用的能力を身につけることを目標とする。具体的には、次の通りである。

授業の進め方
知識を身につけるだけでなく、授業での学びを通じて宇大スタンダードに記載のものを身につけるために、ルーブリックを活用する。

ルーブリックを活用することで、学習の目標を明確にし、自己評価を行う。

ルーブリックとは、学習の目標を明確にし、自己評価を行うためのツールである。具体的には、学習の目標を明確にし、自己評価を行うためのツールである。

宇大STDとルーブリックの活用
従来の成績評価（秀・優・良・可）で測れる学力だけでなく、多様な能力を測り、可視化していく。このような多様な能力を測るためには、各々の成績評価の指標が必要になるため、右に記すルーブリックを活用する。

宇大スタンダードの4つの力
1. 知識の修得
2. 自ら問いを立て、それに対する答えを見出そうとする姿勢の確立
3. 多様な能力の測り、可視化
4. 各々の成績評価の指標

スライド14

14

宇サポの展望

ピアサポートの多様性
(学生参画については「4.【参考】」も参照)

学生参画が進む三領域の位置付け (鈴木 2018)

活動に応じた専門性

大学運営改善
参画する学生は、全学生を代表する責任を有し、責任に見合った高い資質・能力の持ち主であることが求められる。

教授学習支援
授業外において教育課程に関連する支援を提供する「学習支援領域」と、授業を中心とした正課教育での支援を展開する「教授学習改善領域」をまとめたもの。

個人 ← 教授学習支援 → 組織

学生支援

学生としての特性

スライド15

15

宇サポの展望

学生による自律的な組織として、学生たちには宇サポに居場所を見出してもらいながら、三つの領域をカバーする学生参画を実現していきたい（という長期的な展望）。

活動に応じた専門性

大学運営改善

個人 ← 教授学習支援 → 組織

学生支援

学生としての特性

スライド16

16

宇大ラーニングサポーターの特徴

十分熱心に活動しているにもかかわらず…
要らない子になりたくない。

個人の力が発揮できる環境を整える必要がある
地位関連の自己評価として、組織それ自体の地位に関するプライドと、組織内の当人の地位に関わるリスペクトがある。

組織文化には成員たちの斉一性を重視するプライド・ベースの文化と、個人の自律的な貢献を重視するリスペクト・ベースの文化がある。

成員たちは、プライド・ベースの文化が顕在的な組織においては、主としてそこに所属していることそれ自体による喜びを味わい、またリスペクト・ベースの文化が顕在的な組織においては、主として個人的才覚の発揮を通じて自信を深めることができよう。

(山田 2017; Tyler 1998, 2001)

スライド17

17

宇大ラーニングサポーターの特徴

様々な学年や活動歴のメンバーが混ざっているにもかかわらず…
フラットで密接な関係性が実現

仲の良さよりもパフォーマンスの向上を重視した方がよい
仲良くなれば1つにまとまって、良いことをするだろうというのは、あまりにも人間を単純、好意的に見過ぎている。……一致団結している人々は、上昇するスピードとともに、落ちていくスピードも速いのである。

凝集性の高さがよりよいパフォーマンスをもたらすという面はたしかにあるのだが、それ以上に、良いパフォーマンスによって高い凝集性がもたらされるという影響の方が強力であるということを示している。すなわち、生産性を凝集性の結果ではなくむしろ先行要因に位置づけた方がよいということを示唆しているのである。

(高木 2013)

スライド18

18

宇大ラーニングサポーターの特徴

存在の独自性、抽象的
われわれ宇サポは、〇〇である。

表現の独自性、具体的
われわれの中身

“われわれ”という純粋意識
組織レベルで成立する集合的自己カテゴリーゼーションは、自領域を抽象的に画定することで組織アイデンティティを根本から支えている。それは純粋に認知的な作用であるがゆえに、組織の具体的な意味内容がときに大きな混乱をきたしたり、あるいは激しく動揺したりしたとしても、それ自体安定的に保持される可能性がある。そして、そうであるかぎり——主語としてのわれわれが有意であり続けさえすれば——組織はアイデンティカルな（同一の）ものとして存続することになるわけである。

“われわれ”の中身
組織文化は、いつも共有度が高いとはかぎらず、また他の組織と類似した場合もある。さらに組織の文化的な意味内容は、時とともに大きく変わってしまうかもしれない。……組織文化は組織アイデンティティの一義的な支えとはなり得ないのである。……組織は強い集合的自己カテゴリーゼーションを意味ある形で保持できれば、自らの構造に関しても文化に関しても、時間的・空間的にかなりの程度の多様性を許容することが可能となる。▶強靱でしなやかな組織に

選考過程を重視し“われわれ”という意識をつくる必要がある

(山田 2017)

スライド1

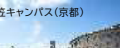
Student Successを中心に据えた学生支援

スライド2

立命館大学の概要・特徴



Shrine School of Science and Philosophy



衣笠キャンパス(京都)

学部：文、産業社会、文学、国際関係
*学生数：13,075人



ひめじ・くさつキャンパス(姫路)

学部：経済、理工、薬、生命科学、
スポーツ健康科学、食マネジメント
*学生数：12,270人



大塚ひばりキャンパス(大阪)

学部：工学、政策科学、総合心理、
グローバル教養、情報理工学部、医療
*学生数：9,760人

学生と大学での学びの特徴

- **全国から集まる学生**
近畿圏出身者と近畿圏外出身者が半々
- **多様な文化を持った学生**
70の国と地域から3,000名の留学生
- **「学び」や「経歴」の選択性が豊富**
多様な正課外プログラムと400団体以上のクラブ・サークル
等があり、正課外活動に取り組む学生が多い

主体的な「学び」や「成長」を促進するしくみ

● 学生学びや正課と正課外の両立と大学生生活を充実するためのサポート

● **Student Success Program(SSP)2017年～**

集英館キャンパス
法務・教職研究科
330人

スライド3

Student Success Program(SSP)の体制



筑波大学
University of Tsukuba

SSPの目的「自立した学習者」の育成

学生「一人ひとりが正課と課外すべての学生生活を通して、学びの主体として「自立」、最大限の「成長」を遂げられるようになるための学生支援。

支援対象 在籍する全ての学生

全16学部21研究科 **39,397人**(2024.7.1現在)

衣笠キャンパス

学部：法、産業社会、文、国際関係

コーディネーター2名
・ソーシャルワーク
・教育系の専門家

ピア・サポーター20名前後

びわこくさつキャンパス

学部：経済、理工、農、生命科学、スポーツ健康科学、食マレジメント

コーディネーター2名
・心理学
・教育系の専門家

ピア・サポーター15名前後

大飯いばらきキャンパス

学部：経営、政経科学、総合心理、グローバル教育、映像、情報理工

コーディネーター2名
・心理学
・福祉系の専門家

ピア・サポーター20名前後

スライド4

SSPの特徴（学生配布用・ハンフより）

1 自立した学びで学ぶと成長する自立SSPのサイクル

① 目標を設定し計画を立てる
自分の学習目標を設定し、達成するための計画を立てる。

② 中期計画に自分を入れる
自分の学習目標を設定し、達成するための計画を立てる。

③ 実行する
自分の学習目標を設定し、達成するための計画を立てる。

④ 振り返る
自分の学習目標を設定し、達成するための計画を立てる。

2 学生のニーズに合わせて多様な実施

SSPは、学生のニーズに合わせて多様な実施方法があります。例えば、① 1人1台のタブレット端末を活用した学習、② 1人1台のタブレット端末を活用した学習、③ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、④ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、⑤ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、⑥ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、⑦ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、⑧ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、⑨ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、⑩ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、⑪ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、⑫ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、⑬ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、⑭ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、⑮ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、⑯ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、⑰ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、⑱ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、⑲ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、⑳ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㉑ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㉒ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㉓ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㉔ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㉕ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㉖ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㉗ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㉘ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㉙ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㉚ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㉛ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㉜ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㉝ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㉞ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㉟ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㊱ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㊲ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㊳ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㊴ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㊵ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㊶ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㊷ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㊸ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㊹ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㊺ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㊻ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㊼ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㊽ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㊾ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、㊿ 1人1台のタブレット端末を活用した学習、

スライド5

なぜSSPはできたか？

大学から

- R2020計画
- 包括的支援体制の整備
- 学びの立命館モデルの構築
- 課題を設定し主体的に学ぶ力
- Borderを越えてチャレンジする力
- 集団、個の視点での支援
- 集約の質保証
- 正課外・課外自主活動の活性化

学生から

- 正課と課外両立
- アスリート学生からの声
 - 「学業ガイドライン」「入学前教育」
 - 「立命館スポーツ宣言」
 - 「学生アスリートの声」
- 全学協議会での学生要求
 - ①正課と課外の両立困難学生への支援
 - ②クラブ・サークル等の組織マネジメントの支援

現場から

- 明確な関わりではないが支援をそのもよう拡大
- 何に困っているかわかっていない／高校と大学の違いにないでいい／もっと成長したい／もっと充実した学生生活を送りたい／正課課外両立がむずかしい／支援を自ら求める学生……
- どこに相談していいかわからない学生の存在

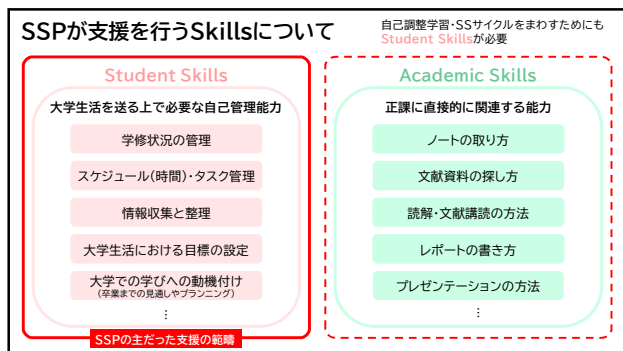
学習支援を具体化するプログラムの立ち上げ(対象は課外自主活動団体の学生)を完全に提起
学業にとどまらない関わりと人への支援の必要性から、全学生を対象とした学習支援として構築

スライド6

Student Successとは 定義と寄与する要因

定義: Student Successは米国の高等教育分野において注目されてきた概念であり、古くは成績や卒業、学位の取得など学業面での成功を意味していたが、近年は「**学業の達成・教育目的に沿った活動への参加・満足度・期待される知識や技能、能力の習得・継続性・教育目的の達成・卒業後の業績**」と再定義 (例:Kuh et al., 2006)

スライド7



スライド8

おわりに—SSPへのニーズが高まる背景、そこから予想される今の学生像は？ SSP

背景1 コロナ禍で情報提供・共有のスタイルが一気にデジタル化・オンライン化された
 →自分が必要な情報は主体的に取りにいかなければならない現状(偶発的な情報取得の減少)

背景2 授業スタイルや評価方法なども多様化
 →毎週の課題や授業外の活動が増加しマルチタスク化が進んでいる
 →チームワーク活動の経験が少なく他者との関係性構築に不安

背景3 就活やインターン研修の早期化が進む
 →学業や課外活動、アルバイト等との両立で多忙。タイパ・コスト重視
 インプットとアウトプットを繰り返し表面上の取り組みになりがち
 メンテナンス(リラクゼーションや自己省察など)にかける時間の減少

現在の大学生はこれまで以上に自分自身での**情報収集・自己管理を行うこと(高度なStudent Skill)**が要求されている

経験が少ないため、環境が整わなかったり情報が少ないと**心理的安全性が担保されず一歩踏み出せない、一人で抱え込む**

自分の状況を言語化して人に伝えるのが**苦手(他者と振り返る経験の減少)**

■今後SSPがしていきたいこと・できること
 引き続きStudent Successを中心に据え、各部署と連携し、**小集団(ヒア・サポーター)や集団支援による多様な出会い(エンゲージメント)の機会を組織的に提供していく**予定
 現場で得られた知見を組織内で共有しボトムアップ、学生のStudent Successのために大学の教育に生かすこと

スライド9

インスタぜひフォローしてね～

SSP公式アカウント



RITSUMEIKAN_SSP

OICピアのアカウント



@RITSUMEIKAN_SSP_OIC

SSPのインスタフォローよろしくおねがいします！大学生活の悩み、各キャンパスの訪す前情報などを発信します SSP

スライド10

引用・参考文献

- Davis, S.K. & Hadwin, A.F. (2021) Exploring differences in psychological well-being and self-regulated learning in university. *Student Success*. *Frontline Learning Research*, 9(1), 30-43.
- Kuh, G. D., Kinzie, J. L., Buckley, J. A., Bridges, B. K., and Hayek, J. C. (2006) "What matters to student success: A review of the literature (Vol.8)". Washington, DC: National Postsecondary Education Cooperative.
- 清水栄子 (2021) 「日本アカデミック・アドバイジング協会の設立について」日本アカデミック・アドバイジング協会JJA (<https://academicadvising.jp/greeting/>) (2024年2月21日)
- 山田剛史ほか (2024) 「Student Successの実現に向けた学習支援に関する研究: 学習支援専門職員へのフォーカスグループインタビューを通じた授業的検討」日本アカデミック・アドバイジング協会 JJA vol.2
- 山形一雄ほか (2023) 「個別の学習支援が大学生の学習力向上に与える効果の検討 - Student Success に着目した指導開発から開拓の効果測定まで -」大学教育学会誌 145(2)
- 松本道彦ほか (2022) 「学生生活のセルフマネジメントスキルの評価ツール」Student Success 尺度の開発」大学教育学会第44回大会発表要旨集, 168-169.
- Van der Zanden, P.J., Densessen, E.C., Illesse, A.H., & Meijer, P.C. (2018) Domains and Predictors of first-year Student Success: A systematic review. *Educational Research Review* 23, 57-77
- Zimmerman, B.J. (1998) "Developing self-fulfilling cycles of academic regulation: An analysis of exemplary instructional models." In Schunk, D.H., & Zimmerman, B.J. (Eds.), *Self-regulated learning: From teaching to self-reflective practice*. New York, Guilford Press, 1-19.
- Zubizarreta, J., & Mills, B. J. (2009). *The learning portfolio: Reflective practice for improving student learning*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.

スライド1

SHJO UNIVERSITY

FD・SDの有機的連関を目指して ～教職学協働で取り組む教育改善～

成城大学 教育イノベーションセンター
主任 肥田 奈緒子

第30回FD・SDフォーラム(大学コンソーシアム京都)
2025年3月1日(土)

スライド2

成城大学の概要

成城大学の特色

- Point1 ゼミナールを中心とした少人数教育
- Point2 充実の全学共通教育科目群
 - 特色ある教授教育
 - 文理融合のテーマサイエンス教育
 - 成城国際教育プログラム(SIEP)
 - 就業力育成・認定プログラム
- Point3 学生によるサポート体制
- Point4 特色ある研究施設

2024年3月1日現在

SEIJO UNIVERSITY

スライド3

成城大学のFD・SD活動

授業改善アンケート, 新任教員研修会, FD・SD講演会, FD・SDワークショップ, 授業カタログ, ベストティーチャー賞

SEIJO UNIVERSITY

スライド4

成城大学のFD・SD活動

「授業カタログ」とは...

・本学の教員が授業で実践している工夫や優れた取り組みの事例を収集し「見える化」することで、授業改善や効果的な履修指導につながることを目的に発行。

⇒「授業改善アンケート」において高い評価を得ている先生方へのヒアリング

⇒ベストティーチャー賞の受賞教員の授業を掲載

SEIJO UNIVERSITY

スライド5

FD・SD活動の有機的連関

授業改善アンケート, ベストティーチャー表彰制度, 学生の満足度向上, 教員の授業改善, FD・SD講演会ワークショップ等

SEIJO UNIVERSITY

スライド6

進んだ学生サポーター活動

サポーター, サポーター女子「カップ」, サポーターフォーラム, サポーター・学生・教員, サポーター・学生・教員, サポーター・学生・教員

SEIJO UNIVERSITY

スライド7

ピアサポーター

・2017年度の成城学園創立100周年を機に発足

【目標】
成城大学のピアサポーターは**教職学協働**を基本理念とし、**教員・職員・学生が協力しあい、よりよい大学にしてい**くことを目標とする

①ピアサポートルームを拠点とした学習サポート、②講座の企画・実施、③**授業サポート**（※給与支給）、④**その他の自主的活動**

■養成研修
※講師・・・学内教職員
および外部講師の招へい

ピアサポーター第1期 総括式（2017年10月）

SEIHO UNIVERSITY

スライド8

①ピアサポーターによる「授業カタログ」の取材

・「授業サポート*」としてピアサポーターを活用いただいている授業を掲載
・ピアサポーターが授業を取材し、「授業カタログ」の記事を作成（2024年度～）
→授業見学（2回）
→教員インタビュー
→受講学生インタビュー

NEW

*研修を受けたピアサポーターをアクティブ・ラーニング型授業に配置することができる制度。
成城大学ピアサポーターの唯一の有償活動。

SEIHO UNIVERSITY

スライド9

②-1 時間割相談会（新入生支援）

■2024年度は、延べ601名の新入生の相談に対応（収容定員1,215名）

【参考】2023年度626人（個別相談）、1003名（セミナー）
2022年度509人、2021年度255人、2020年度 397人、2019年度 410人

ピアサポーター主催
時間割相談会
4/3③-4/5③
10:00～16:00
4/6③
10:00～11:00
新入生専用3階ホール・エントランスホール
オリエンテーション後は各班が所属するフロアへ移動し、各自の所属している学部・学科にお話しください。

《教職学協働の取組》
■事前研修（教務部・教育イノベーションセンター）
■職員と「時間割相談会」の振り返り
■学長・副学長との懇談会（報告会）

FD・SDの場

SEIHO UNIVERSITY

スライド10

②-2 時間割相談会（学長との懇談会）

■**教職学が集うFD・SDの場**

・「在学生コーチ」の視点から、新入生から多く出た質問や『履修の手引』を読んで気づいた点、カリキュラムに対する意見について等、**学生の生の声を届ける機会。**

SEIHO UNIVERSITY